

## 第54回 記者懇談会実施概要

1 日 時 平成20年12月19日(金) 15時～

2 場 所 100周年記念会館 第2会議室

### 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00～16:00)

・大橋<sup>おおはし</sup> 俊介<sup>しゅんすけ</sup> システム理工学部准教授  
発表テーマ「超電導磁気浮上搬送システムの研究」

・三枝<sup>さえぐさ</sup> 憲太郎<sup>けんたろう</sup> 政策創造学部准教授  
発表テーマ「イングリッシュ・カントリーサイドの変容  
－ 移住による単一化と多様化のプロセス －」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00～17:00)

- ① 2008年に判明した薬物事件に関する報告書(総括)について [資料1](#)
- ② 臨床心理専門職大学院給付奨学金制度の施行について [資料2](#)
- ③ 関西大学奨学金制度について [資料3](#)
- ④ 関西大学ソシオネットワーク戦略研究機構設立記念事業「ソシオネットワーク戦略研究国際会議」の開催について [資料4](#)
- ⑤ 名誉博士号の贈呈について [資料5](#)
- ⑥ 「第2回関大ふくい笑い講」及び「第3回関大笑い講」の開催について [資料6](#)
- ⑦ 「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の実施について [資料7](#)
- ⑧ 関大生の活躍について [資料8](#)

### 4 大学側出席者

河田悌一学長、芝井敬司副学長、良永康平学長補佐

大橋俊介システム理工学部准教授、三枝憲太郎政策創造学部准教授、木村洋二社会学部教授、久保田賢一総合情報学部教授、大西正曹社会学部教授、与謝野有紀社会学部教授

川原哲夫学長課長、花谷いしづ学生生活課長、藤本清高広報室長、木田勝也広報課長 他

### 5 参考資料

(1) 学長メッセージ

(2) 第13回先端科学技術シンポジウム パンフレット

以 上

## 超電導磁気浮上搬送システムの研究

システム理工学部 准教授 大橋 俊介

都営地下鉄大江戸線や大阪市交通局鶴見緑地線、今里線などに導入されているのはリニアモータと呼ばれる動力源である。通常のモータと違い、リニアモータは直線運動を直接発生させるモータである。

一方、物体を磁気の働きにより非接触で浮上させるのが磁気浮上システムである。磁石と鉄を用意し、両者を近づけると、ぴったり付こうとする。反対に離すと引き付ける力がどんどん弱まる。よって、ちょうど鉄を浮かすことのできる位置はただ一つとなる。この状態を自然に保つことは難しい。よって、磁気で物体を浮かせるには電磁石を用い、その強さを制御（コントロール）することで実現する。

この2つ、リニアモータと磁気浮上を組み合わせることで完全に浮上した状態で物体を移動させることが可能となる。この応用例が建設予定の超電導リニアモーターカーや上海空港と市内を結んでいるトランスラピッドシステム（ドイツ製）である。私の研究室では工場内搬送を目的とした超電導磁気浮上搬送システムの研究を行っている。

まず超電導の特徴は電気抵抗がゼロである。これは従来の銅などの材料よりもはるかに大量の電流を流せることを意味しており、非常に高い磁場を必要とする用途（医療機器のMRIなど）に利用されている。ところで超電導にはその他にも重要な特徴がいくつかあり、その中の一つに磁束ピンニングと呼ばれるものがある。超電導体の中には磁束を捕まえる作用を持つものがある。この磁束ピンニングの性質を利用すると、磁気浮上を一切の制御（なしに行うことが可能となる。この浮上方式とリニアモータを組み合わせることで地上側との接触が一切ない搬送システムが可能となる。よってクリーンルーム内など特殊な環境で用いることが期待される。

### プロフィール

1992年東京大学工学部電気工学科卒業、1997年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士（工学）。同年より関西大学工学部に勤務。現在システム理工学部准教授。電気機器を中心とし、パワーエレクトロニクス、超電導応用、リニアシステム、磁気浮上システムの研究に従事。2004年4月から1年間、ドイツアーヘン工科大学(RWTH-Aachen)客員研究員。

# イングリッシュ・カントリーサイドの変容

## — 移住による単一化と多様化のプロセス —

政策創造学部准教授 三枝憲太郎

### [概要]

イギリスとりわけイングランドのカントリーサイドは、ある種強力な吸引力をもった空間として内外の人々を引きつけ続けている。コッツウォルズや湖水地方などが日本からの観光ツアーの目玉として取り上げられることも多いので、日本人にもなじみ深い場所だろう。このイギリス全国土の70%を占める空間の特異な点は、圧倒的にポジティブなイメージを付与されているところにある。そこからは一般に「田舎」あるいは「地方」と呼ばれる非都市的空間から連想されるような負の側面は想起されない。イギリス英語における *countryside* を単純に「田舎」と訳せないゆえんである。そうした文化的イメージが成立してきた背景には、イギリス特有の階級社会の空間的配置の構造がある。近世以降イギリス社会を支配してきたのは地主階級であるが、彼らとその本拠を置いていたカントリーサイドは、豊かさと権力と地位の象徴としてとらえられるようになったわけである。

そうしたイメージに引きつけられる形でこの空間にやってくるのは単に観光客だけではない。現在そこに暮らす住民の多くは都市部からの移住者によって占められている。イギリスでは、特に1970年代以降いわゆるカウンターアーバナイズーションと呼ばれる人口の非都市部への逆流が現在に至るまで進行しているが、こうした流れの中でカントリーサイドへと移住してきた人々が現在この空間の住民の多数をなすに至っている。ここでカントリーサイドへと移住してきた人々には一つの共通する特徴が見いだされる。それは、彼らの多くがいわゆるサービス・クラスと呼ばれるミドルクラスの一部に属する人々であるという点である。彼ら移住者は、様々なメディアを通じて自らの価値観をカントリーサイドという空間に刻印していく。それは目に見える景観にも、地域コミュニティの組織の在り方にも反映されていく。この結果、「カントリーサイド＝ミドルクラスのテリトリー」という新しい空間認識がイギリス国内において確立した。ここでいうミドルクラスとはわざわざ注釈をつけるまでもなく白人のイギリス人のことである。

実際、近年イギリスといえば、多民族国家あるいは多文化主義の社会というイメージが広範に流布しているにもかかわらず、ごく最近までカントリーサイドにおいて非白人の姿を目にすることはきわめて稀なことであった。ところが、この5年ほどの間に状況は劇的な変化をみせている。白人ミドルクラスのテリトリーに突如多くの外国人労働者が暮らし始めたのである。その多くはEUの拡大に伴って東欧諸国から農業労働者として移動してきた人々である。ミドルクラスのためのアメニティ空間としての性格を色濃くしていたカントリーサイドが、人の移動に従ってまた新たなイメージを刻印されつつある。そうした現場の状況について報告したい。

### [プロフィール]

1967年神戸市生まれ。関西大学政策創造学部准教授。専門は、イングランド社会論、空間論・場所論。早稲田大学第一文学部卒業、エディンバラ大学大学院社会人類学科修了。08年4月以降、現職。社会人類学博士。論文に、「カントリーサイドという空間：ハンティングを通して見たイングランドの空間編成の現場」「新しい場所と土地の記憶：イングランドにおける国内移住者と土地との結びつき」「クラフトとしての住環境：イングランドにおける *village* 理念が生成する空間」など